HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	省略：その復元可能性の問題
Author(s)	塩谷, 幸子
Citation	独語独文学科研究年報, 18, 1-18
Issue Date	1992-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/25842
Type	bulletin (article)
File Information	18_P1-18.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

省略－その復元可能性の問題

塩　谷　幸　子

0．序

「省略文」からイメージされることとして、まず、何かしら不完全な文であることが挙げられる。それに関連して、省略文に対応する「正しい」形、もしくは「元の」形があること、さらにそのような完全な文に復元可能であることが、漠然と想起されるであろう。省略現象を扱った様々な論文でも、このことは暗黙の了解として、現象の説明が行われているものが多い。

これまでの研究をざっと見ただけでも様々な方法のアプローチが存在する。例を挙げると、Bühler(1934)のeinen schwarzen [1]、また、Wittgenstein(1960)のPlatte! [2]の語用論的な考察、あるいは、等位接続された文での省略の仕方（文の前半と後半とで共通する要素を削除するという考え）の観察が広く行われている。日本語の省略についても幅広く研究が行われ、特にウナギ文（「ぼくはうなぎだ」に代表される文型）の研究、それから情報構造の面から省略文を説明する試みが見られる。いずれにせよ、軸になるのは「復元可能性」ということ、つまり復元可能な要素のみが削除の対象となり得るという考え方である。

以下の章で、いわゆる「省略文」について、特に省略文とその復元可能性の考察を通して、省略文というものの特質に触れてみたい。

1．非具現・省略・ウナギ文

まず、この論文で取り扱う対象について、簡単に触れておく。Thomas（1979）で省略現象に関わる問題が論じられているが、とりあえずそれを手掛かりに、対象を絞ることにする。

Thomas（1979）では現象を３つに分類している。すなわち、非具現（non-realization)、省略（ellipsis）、脱落（elision)の３つである[3]。

非具現というのは、「なくても良い」要素がないものである。わかりやすい例としては、受動態の動作主がある。

(1) a.Hans wurde getötet.

b.Hans wurde von jemandem getötet.

c.Hans wurde von Maria getötet.

d.Hans wurde von Maria durch einen Schuß getötet.

(1a) から (1d) の文のうち、どれが用いられるかは、当然話題や場面によるが、von Maria やdurch einen Schuß などを表現するのもしないのも話し手の自由である。しかし、述べられていない要素はなくても良い要素であり、解釈の際にも補われる必要はない。

(2) (3) は、語彙的な非具現の例である。

(2) a.Anna singt.

b.Anna singt ein Lied.

(3) Als wir ankamen, kochte Peter. (=Klein 1985)

これに対し、省略・脱落は、あるべき要素が欠落しているものである。省略は、欠落があるという手掛かりとその復元は、言語内のコンテクストによる。

(4) „Er befahl mir zu singen."

„*Ich würde nicht,* wenn ich an deiner Stelle wäre."

(5) „Willst du uns denn verlassen?"

„*Ich muß,* ich darf keine Zeit verlieren."

(„Die unendliche Geschichte")

欠落があるということは、すぐに見て取れるであろう。欠落箇所に, ϕを置く。

(4)' „Er befahl mir zu singen."

„*Ich würde nicht* ϕ , wenn ich an deiner Stelle wäre."

(5)' „Willst du uns denn verlassen?"

„*Ich muß* ϕ , ich darf keine Zeit verlieren."

これらは先行文脈から補うのが可能である。

一方、脱落はあるべき要素の復元が直示的場面に基づいている。

(6) Schon genug?

(7) Mit oder ohne?

(8) Keine Schmerzen mehr? („Die unendliche Geschichte")

(9) WUSSTE ES VORHER („Momo")

この場合、一人称及び二人称が関わっているのが普通である[4)]。

この論文で取り扱う対象は、Thomas (1979) の定義でいうところの省略と脱落とする。つまり、あるべきものが欠落している現象である。

なお、日本語にはウナギ文と呼ばれる文型がある。「私はうなぎだ」という表現で、「私の注文したのはうなぎだ」を意図するものである。

(10) 吾輩は猫である。

(11) ぼくはうなぎだ。

(12) 中島梓は栗本薫だ。

(13) 渋谷先生はフォンターネだ。

(10) から (13) までの例は、「AはBだ」という、形式的に単純なコピュラ文である。しかし、「A＝B」を表わしているのか、帰属を表わす「A∈B」なのか、それともいわゆる「ウナギ文」であるのか、文型だけでは決定できない[5)]。判断には、場面・状況・一般的な知識等が必要とされる。ちなみに (10) は夏目漱石の小説のタイトルに等しく、(12) は、作家栗本薫が「中島梓」というペンネームで評論を書いている、すなわち栗本薫と中島梓が同一人物であること、(13)では、フォンターネというドイツ写実主義の作家がいたことを知っているか否かで解釈に影響が出るものと思われる。

(14) 新妻先生はドイツ語だ。

(15) 今日は桑田だ。

(16) 「今月は祝言だ。当分は遊べんな」 (『蟬しぐれ』)

(17) 「おれもずいぶん苦労したぞ。まず言葉だ」 (『蟬しぐれ』)

(10) から (13) までの例と比べると、(14) から (17) は、明らかに省略文的である。発話された文の他に、前後の文脈や、話題となっている人物・事柄についての知識（桑田はプロ野球選手・投手であるetc.）を伴って理解される。これらは日本語として規範的な文と認めら

れているかも知れないが、解釈の際に何か補うものがある点で、省略された文である。

ここで簡単に対象とする省略文についてまとめておく。これまで簡単に見てきただけでも、省略の問題がコンテクストと密接に関わっていることが見て取れる。復元の手掛かりは、言語的なものにせよ物理的なものにせよ、コンテクストに由来している。

また、省略文というものは、「省略されているものがある」が故に、省略文たり得るのである。つまり、あるべきものが欠けているものを、省略文と呼ぶべきである。それに関連して、Halliday-Hasan(1976)では、省略と代示（Substitution）とを同種のものとし、両者の違いは先行テクスト中のある語句が二度めに生起すべき場所を確保するために用いる手段の違いによる、と述べられている[6]。すなわち、その場所に場所取りのカウンターが置かれれば代示表現であり、何も置かれない空白のままにしておくなら、省略という手段が選択されるとしている。

以下の章では、「欠けているところがある」省略と、コンテクストの問題について述べてゆくことにする。

2．いかに「省略」するか

省略する際の原則は、文中の旧情報を担う部分が省略され、新情報を担う部分が残されていることである。

(18) a. F Wer hat angerufen?
　　A Peter (hat angerufen).
　b. F Wo ist Peter?"
　　A (Peter ist) In der Schule.　　(=Issatschenko 1978 (4))

先行する文に現われている要素が、対応する答えの文で省略可能である。

(19) F　Arbeitet Peter in Berlin?
　A1 Ja, in Berlin.
　A2 Nein, nicht in Berlin. / Nein, in Leipzig.

in Berlin が反復されることもあるが、この場合in Berlin は焦点のかかっている要素であり、一種の新情報と考えられる[7]。

もちろんこれは、質問と答えのパターンに限るものではない。

(20) Und das erzählst du dir selbst? *Warum?*

(„Die unendliche Geschichte")

しかし、省略されている要素は、先行する文の直接の要素が対応しているとは考えない方が良いだろう。

(21) „Wo bist du geboren?"

„In Linz an der Donau."

„Ich auch." („Das doppelte Lottchen")

(22) „Vor wem bist du weggelaufen?"

„Vor dem anderen."

„Vor welchen anderen?"

„Den Kindern aus meiner Klasse." („Die unendliche Geschichte")

一人称と二人称の間でのやりとりの場合は、少なくとも省略されている要素と対応する先行文の要素との間で人称が変わる。(21) では、先行する二人称の Wo bist du geboren?に対し、以下の想定され得る復元文は、 In Linz an der Donau (bin ich geboren)., Ich (bin) auch (in Linz an der Donau geboren). と一人称が推定でき、(22) でも、一人称と二人称が交互に省略されていると考えることができる。

仮に省略文に対して基礎になる元の文があるとして、その元の文というものは先行文に完全依存するのではない。省略文をめぐって旧情報・新情報と呼ばれるものは、既に述べられたものあるいはまだ述べられていないものと考えるより、先行する談話から推論され得るものと話し手が思っているか否かである[8]。なおこれは、客観的または聞き手による判断なのではなく、話し手独自の判断となる。

さらに細かく見て行きたい。

(23)a.Wovon hast du heute nacht geträumt?"

b.Von einem Kornfeld.

c.Einem Kornfeld.

d.*Ein Kornfeld.

e.*Eines Kornfeldes. (Klein 1985 (=(6)(7))

（23ｂ）が（23ａ）の問いに対する省略的な答えであるが、（23ｃ）のように前置詞をも省略することも可能である。但しその際３格以外が不適であることから、（23ｃ）の３格は、省略されていると想定されるvon の格支配を受けていると考えられる。

ここで、等位構文（Koordination）における省略について触れておきたい。次は、等位構文での省略の例である。

(24) Atrēju sprang von Fuchurs Rücken und stürzte hin.

(„Die unendliche Geschichte")

(25) Fritz haßt und Inna liebt das Leben. (=Klein 1981 (14a))

(26) Welche von euch ist Luise Palfy und welche Lotte Körner?

(„Das doppelte Lottchen")

(27) Meistens geht Maria in die Kirche und Otto in die Kneipe.

(=Klein 1985 (21))

(28) Und weil Mutti Luiselotte heißt, *haben sie das eine Kind Luise und das andere Lotte getauft.*

(„Das doppelte Lottchen")

Halliday-Hasan (1976) では、等位構文における省略は、文の文法構造に依存する、文内でのみ見られる現象であり、談話のつながりに貢献するところがないものであるため、省略から除外している[8)]。そこで、次の例を見ることにする。

(29) a.Wer half wem? - Der Vater der Mutter, der Onkel der Tante. (=Klein 1985 (25))

b.Der Vater half der Mutter und der Onkel der Tante.

（29ａ）と（29ｂ）を比較してみる。（29ａ）は質問と答えの形式をとってはいるが、（29ａ）の答えの文と、（29ｂ）のいわゆるGapping （空所化・穴あけ）の後半の文とに相違は見られない。

(30) Lotte fährt als Luise nach Wien.

Und Luise als Lotte nach München. („Das doppelte Lottchen")

(31) Ich mache zwar nicht so viele Fehler im Diktat. Und im Rechnen auch nicht. („Das fliegende Klassenzimmer")

(30) (31) の例も二文にまたがってPunkt で境界付けられているものの、二番目の文はGapping の後半の文と違いはない。Gapping の前半の文も、狭い意味で先行文脈とも考えられ得、いずれにせよ、旧情報が省略されていると推定され、残されているのは対比がかかっている要素、すなわち新情報である。あるべきものが欠けていると考えられる点で、等位構文に見られる省略も、省略と見なすことが可能である。

次に日本語の例を挙げる。(32) (33) は等位構文の省略に相当する日本語の文である。

(32) その声でふくはちらと文四郎を振りむき、膝をのばして頭をさげたが声は出さなかった。(『蟬しぐれ』)

(33) 二人は手わけして、文四郎は実家に、登世は隣の小柳に相談に走った。(『蟬しぐれ』)

(34) (35) はいわゆる主題のピリオド越えである。

(34) 文四郎は再度、竹刀を八双に構えた。そしてじっと待った。 (『蟬しぐれ』)

(35) 「やつは大丈夫だ。起き上がった」 (『蟬しぐれ』)

日本語では次のような文も見られる。

(36) 言い捨てて、文四郎は外に出た。 (『蟬しぐれ』)

(37) 馬腹を蹴って、助左衛門は熱い光の中に走り出た。 (『蟬しぐれ』)

(38) 文四郎が坐るのを待って、弥左衛門はやや唐突な感じで言った。(『蟬しぐれ』)

主題になっている要素に注目すると、文の前半と後半とで主題が同じ際に、(36) から (38) では文の前半の主題が省略され、後半は省略されずに残されている。

(36)′ a. (文四郎は) 言い捨てて、文四郎は外に出た。

b. 文四郎は言い捨てて、(文四郎は) 外に出た。

このような文型では、文の前半と後半とで共通する要素が省略されていると考えることができる。文の後半の主題を省略するのと同様、文の前半の主題も省略可能である。文の前半で省略されている要素は、「ハ」でマークされる要素であり、これらの文は、等位文的な性格を持っていると言える[10]。

但し、この場合も、文の後半からだけではなく、前後の文脈からも文の前半の主題が推定できるのだと思われる。また、Kuno (1976) によると、Gapping が可能なのは、文の前半からのみではなく、前後の文脈からも推論可能な要素でなければならないとされている[11]。いずれにせよ、等位構文における省略も、コンテクストとの関わりが認められる点からも、省略の範疇で捉えて差し支えない。

先に、省略文とは、あるべきものが欠けている、すなわち省略されていることがわかることを述べた。Halliday-Hasan (1976) の言葉を借りて、カウンターの有無ということを言うなら、代示表現と比較して省略をカウンターのない状態と呼ぶより、目に見えない、または音に聞こえないカウンターがあると形容すべきであろう。あるべきものが欠けているところにゼロ・カウンターがあると仮定しておく。非具現の場合はゼロ・カウンターは置かれていない。ゼロ・カウンターの指すものが、何であるのか、「元の形」と言い切れるのかどうか、次の章で考察する。

3. 省略文の理解

省略文をどのように理解するかという問題は、目に見えないカウンターが何を指しているか、言い換えると、どのように省略文を復元するか、ということに帰結する。旧情報が省略されているので、省略する方法の逆を行って、先行文脈から直接復元の手掛かりを得て解釈する方法が一般的であるように思われるが、果たしてそう単純に行くものかどうか、検討してみたい。

まず次の例を見ることにする。

(39) a.„Ich hab das dunkle Gefühl, als hätte ich furchtbaren Stuß zusammengeschmiert. Hör mal, Kleiner, schreibt man *Provintz* mit tz ?"

b.„Nein mit z."

c.„Aha, das hab ich also schon falsch gemacht. Und *Profiand* ?" Mit f?"

d.„Nein, mit v."

e.„Und hinten?"

f.„Mit t."

g.„Teufel, Teufel. In zwei Wörtern drei Fehler."

(„Das fliegende Klassenzimmer")

(39b) の復元された文は、先行文を考慮して、Nein, (man schreibt Provinz) mit z. と考えられ、それで不都合はない。しかし、(39c) のUnd Profiand? の復元を試みると、例えばUnd wie schreibt man Proviant?であろう。(39c) には、先行文にない筈の疑問詞の要素は現われていない。(39e) についても同様である。(39g) の In zwei Wörtern ϕ drei Fehler. には動詞が欠けているが、補われるべきmache ich などは直接先行文にはない。

(39) では、それでも復元された文と省略された文との間に何らかの関連性は見出だせる。(40) ではどうであろうか。

(40) „Was fehlt dem Kind?"

„Nervenfieber." („Das doppelte Lottchen")

病気の子供の父親と医者との会話である。尋ねていることと、答えていることの内容は、もちろん関連のある事柄である。けれども、答えの文のNervenfieberは、厳密に言うと、質問文の疑問詞に直接対応はしていない。先に挙げた (18) の例では、原則として、質問文の疑問詞と直接対応している要素が省略されずに残されることを示したが、厳密に対応していなくとも許容される。Nervenfieberがfehlenしている、すなわち具合の悪いところが神経熱であるのでないこと (具合の悪いところは、例えば胃なり、心臓なり、精神的なもの、という答えが適切であろう。神経熱というのは病名である。) は少し考えただけでも明白であるが、(40) は、ごくノーマルな問答である。

省略のゼロ・カウンターが何を指示しているのか決定する際には、旧情報の中から指示内容が選ばれなければならないことは、言うまでもない。しかし、(39) (40) を見ただけでも、手掛かりは曖昧なものになっている。では、具体的にどこから手掛かりを得れば良いのであろうか。

もちろん、まず第一に考慮しなければならないのは、先行文脈である。Thomas (1979) が純粋に文脈依存している「省略」ellipsisという分類項目を立てたように、数多くの省略現象が、先行文脈に由来していることは確かであり、その復元の手掛かりも先行文脈に求めることがで

きるのも事実である。

それから、Thomas (1979) によって「脱落」elision という分類がなされたように、直示的場面も大きな役割を果たす。発話に影響を与える環境のうち、実際の場面や状況に即した要因を、物理的文脈と呼ぶなら、純粋に話題として語られ、言葉のみに由来する文脈を言語的文脈と言うことができる[12]。

(41) 言語的文脈

問題となる言語表現ないしは発話の前後関係の脈絡に関わる要因。その言語表現を理解する際に既に言及されている話題やテーマ、先行文あるいは先行の談話によって規定されている情報。

(42) 物理的文脈

場面や状況に関わる要因。問題の表現や発話の背景、その即物的な場に関わる具体的な事物を規定するもの。

さらに、言語的文脈及び物理的文脈のみでなく、それらから推論することのできる事柄も、広い意味で旧情報に含められるであろう。前にも述べた通り、旧情報・新情報というものは、「先行する談話において、既に述べられている・述べられていない」ではなく、「先行する談話から、推論することができると話し手が思っているか否か」であり、よって、先行文の要素に直接由来せずとも、推論可能であれば、省略することができる。そしてそのことは言語的文脈に限定されず、物理的な文脈にまで押し広げて適用されて差し支えないものであろう。

(43) は直示的場面に依存した省略的会話である。

(43) „Du,dort drüben!"
„Aua! Was denn?"
„Fräulein Gerlach!"
„Wo?"
„Rechts!" Die mit dem großen Hut! Und mit der Zeitung in der Hand!" („Das doppelte Lottchen")

それぞれの発話から決まった復元型を特定するのは困難である。けれども、談話の進行には

問題はない。

また、物理的な文脈が重要な役割が果たされることは、現実のある場面に即した会話、特に何かの目標の実現、例えば依頼・買い物などのための計画の一部として会話行為が遂行される場合を想起すれば、明らかであろう。これは、例えばBühler(1934)に見られる、むっつりした一人の客がカフェで、ボーイにeinen schwarzen と言う際、この発話が文の断片であっても、その瞬間には事態に即して容易に理解されるものであって、それで心理的には必要なものがすべて言われている[13]、という場合、また、Wittgenstein(1960)のPlatte! をも、物理的文脈との関連で捉えることができる。

Platte! を例にすると、Platteという語を元にして、計算上いくらでも文を組み立てる、あるいは再構成することは可能である。周知の通り、Wittgenstein(1960)では、Platte! は（44）の役割を果たすことについて述べられている[14]。

(44)Bring mir eine Platte!

そして、同じPlatteに関連して、（45）の例も参照されている。

(45)a.Reich mir eine Platte zu.
b.Bring ihm eine Platte.
c.Bring zwei Platten.

Platte! が（44）の解釈がなされるのが適切であるなら、話し手と聞き手との間にある、両者の経験なり暗黙の了解などを含めた状況が、（45）の解釈を排除するのである。物理的文脈に依存して、求められる用件が果たされることになる。

物理的文脈、もしくはそれから推論可能な事柄を説明するのに役立つ概念として、スクリプト（script）が挙げられる。ここで簡単にスクリプトについて解説しておく。

（46）スクリプト

ステレオタイプ的な出来事の系列に関する一まとまりの知識。期待される整合的な出来事の一続きであり、個人的な経験を通して学ばれるものである。

スクリプトには、その活動に用いられる道具や対象、果たされるべき役割、その活動を始める条件、行動や場面の系列、そしてその結果が含まれる[15]。

スクリプトは、理解の際に新しい情報を組織化するための枠組みを提供し、さらに、次にどのような行動が生じるのかを予測するのにも役立つ。それは、話し手と聞き手との間で共有されていることが必要である。両者の間のある種の既知的な事柄であり、旧情報として省略現象と関わってくるものである[16]。

何度か引き合いに出している、Bühler(1934)のeinen schwarzen も、言うまでもなく場面に依存して解釈がなされるものである。この発話は、

(47) a.Bringen Sie mir bitte einen schwarzen (Kaffee).
b.Ich möchte gerne einen schwarzen (Kaffee).

などに対応した形と考えられるが、復元形、あるいは元の形がどちらであるのかは、決定することができない[17]。

これを、スクリプトの概念を用いて説明を試みると、過去の経験の蓄積の中で、登場人物としてボーイと客、舞台装置としてカフェ、そして、実行される行為として、いくつかの飲み物の中からの選択・注文等が、話し手・聞き手の双方の頭の中に潜在し、実際の場面で誘発され、十分用件が果たされることになる。

このスクリプトの概念が、省略をはじめとする言語的な諸現象に対する説明の際に、どれほどの効力を持つものかという評価は、今後の研究の成果にかかってくる点もあろうが、少なくとも、省略現象については、目的のはっきりした場面に関わる省略文の解釈を論じる場合には、有効な説明が可能である。

スクリプトを含めた物理的文脈の省略現象で果たす役割としては、ゼロ・カウンターの指す事柄の手掛かりを与えると同時に、関係のないもの、すなわち指示し得ないものの排除であろう。言語的文脈のみでは絞り切れないかも知れない解釈の可能性を、物理的文脈が制限するのである。そして、その際復元型が一つに特定できなくとも、それは特に不思議なことではない。むしろ、ある一つの省略文に、「元の形」と「復元した形」が必ず一対一対応し、「元の形」と「復元した形」が等しいと考えるべきではない。このことは、言語的文脈に依存する省略でも同様である。

ここで、等位構文に見られる省略について検討してみたい。等位構文での省略は、文の前半と後半とで共通する要素を削除するという考え方が一般的である[18]。

(48) Der Laster hat einen Mann erfaßt und (der Laster hat) ein Kind

zu Boden geschleudert. (=Stegner 1985(9))

(49) Karl soll seiner (Mutter helfen) und Maria soll ihrer Mutter helfen. (=Klein 1985(14))

しかし、単純に同じ要素が復元できるとは言い切れない。

(50) Ein Nachbar war da und (-/er/der/*ein Nachbar) hat sich ziemlich beschwert. (=Klein 1985 (23))

ここで問題になっているのは、(50) の文の後半の主語である。前半の主語と同じ対象のことを述べているなら、erやder のように代名詞に置き換えるのは適格であるが、文の前半と同じ形のein Nachbar を用いるのは認められない。指示対象が同じである場合、二度目に現われる時には不定冠詞を用いることはできない。

(51) a.Ein Mädchen stand an der Ecke und - winkte mir über die Straße zu. (=Klein 1985 (8))

b.Ein Mädchen stand an der Ecke und ein Mädchen winkte mir über die Straße zu. (=Klein 1985 (9))

(51b) のようにein Mädchen を繰り返すと、指示対象が異なることになる。よって、文の前半と後半とで共通する要素を省略して (51b) から (51a) が作られるとは言えず、また、同一要素を復元することもできない。

(52) a.Claudia stand an der Ecke und - winkte mir über die Straße zu. (=Klein 1985 (10))

b.Claudia stand an der Ecke und Claudia winkte mir über die Straße zu. (=Klein 1985 (11))

(52) は、主語が固有名詞である。(52b) の後半のClaudia が省略されて (52a) の文になると説明できなくもないが、(52b) の文の前半と後半にある二つのClaudia の指す対象が同じ一人のClaudia とすると、(52b) は不自然な文となる。同じ対象を指示していても、同

じ要素を復元できるとは限らない。

省略文を復元するのは容易でない。言語的な文脈が省略文の理解の際の重大な手掛かりであるのはいうまでもないが、ゼロ・カウンターは必ずしも先行文脈と同じ語彙では置き換えられない。省略文の「省略されているところ」に対して、「何が」省略されているのかは、決め難い。ある省略文に対応する復元型を特定することは、物理的文脈に依存する省略現象だけでなく、話題として語られるような、純粋に言語的文脈に依存する省略現象においても、一筋縄では行かないものである。そして、省略文は、復元しなくても十分理解に事足りるものである。

4. まとめ

簡単に省略文について整理しておきたい。これまで考察してきたことから、省略文は、必ずしも対応する復元文、あるいは元になる文を持つものではないことが明らかである。省略文と対応する復元文・元になる文は、特定することができない。復元可能であったり、また聞き手が推定することができるとは言えるが、ある一つの決まった復元型は存在していない。このことは、言語的文脈に依存する省略にも、物理的文脈に依存する省略にも、共通して言えることである。

もちろん、傾向として復元型の推定しやすい省略文と、推定しづらい省略文が存在することは事実ではあるが、元の文・省略文・復元文の一対一対応、また、元の文・復元文の同一性は主張し得ないものである。

それでもなお、省略文は、どこか省略されている箇所を持つ類いの文であるのが、その最も特徴的なところである。そして、復元された形は特定されずとも、何らかの文脈（旧情報）に依存して理解される文である。

注

1） Bühler(1934), S. 155 .

2） Wittgenstein(1960), S. 246 .

3） 非具現・省略・脱落という訳語は安井（1983）による。

4） Lyons(1968) 参照。Lyons は、コンテクストに依存している「省略」を文法的に不完全な文、Got the tickets?のように「脱落」しているものを、コンテクストから独立しているため、完全な文であると述べている。

5） 坂原（1990）, S. 30.

6） Halliday-Hasan (1976) . S. 143 .

7） 久野 (1978) 「省略順序の制約」参照。省略は、より古い（より重要度の低い）インフォーメイションを表わす要素から、より新しい（より重要な）インフォーメイションを表わす要素へと順に行う。即ち、より新しい（より重要な）インフォーメイションを表わす要素を残して、より古い（より重要度の低い）インフォーメイションを表わす要素を残すことはできない。

8） 村田 (1982) , S. 185 , S. 188 .

9） Halliday-Hasan (1976) . S. 203 .

10） 久野 (1978) , S. 114-123 .

11） 久野 (1978) , S. 85, また、Kuno (1976) , S. 310 , 脚注。JohnとBillについて予備知識のない場合、Gapping は行われない。

(i) a.Q: What happend?

b.B: John persuaded Bill to examine Jane,and *(John persuaded) Tom (to examine) Martha.

12） 山梨 (1988) , S. 40.

13） Bühler(1934), S. 155 , S. 157 .

14） Wittgenstein(1960), S. 246f.

15） 小谷津編 (1985) 参照。

16） 吉川 (1988) では、言わなくても判る了解事項について、

1. 場面に関与する人／物／事態／様態の既存事項

2. 談話の文脈における既出事項

3. 既存事項や既出事項の場面のスクリプトに関する知識や同定をはじめとする種々様々の背景的知識

と分類し、1, 2, 3を総称して既知事項と呼んでいる。

17） Tschauder(1986) , S. 470 .

18） Klein(1981) , Klein(1985) , Stegner(1985) 等。

例文出典

Kästner, E.: Das doppelte Lottchen. Köln. 1959.

Kästner, E.: Das fliegende Klassenzimmer. Köln. 1959.

Ende, M.: Die unendliche Geschichte. Stuttgart. 1979.

Ende, M.: Momo. Stuttgart. 1973.

藤沢周平　『蟬しぐれ』　文春文庫　1991

参考文献

Betten, Anne. 1976. Ellipsen, Anakoluthe und Parenthesen. Fälle für Grammatik, Stilistik, Sprechakttheorie oder Konversationsanalyse? In : Deutsche Sprache 4. 207-230.

Bühler, Karl. 1934, 1965[2] . Sprachtheorie. Stuttgart.
脇阪豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子（共訳）1983　『言語理論（上）』、
脇阪豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子・杉谷眞佐子（共訳）1985　『言語理論（下）』　クロノス

Grice, H. P. 1975. Logic and conversation. In : Cole, P. and J. L. Morgan. (ed.) Syntax and semantics, vol.3 : Speech acts. New York. 41-58.

Halliday, M. A. K. and Reqaiya Hasan. 1976. Cohesion in English. London.

Issatschenko, von Alexander. 1978. Kontextbedingte Ellipse und Pronominalisierung im Deutschen. In : Dressler, Wolfgang. (Hg.) Textlinguistik. Darmstadt. 79-92.

神尾昭雄　1990　『情報のなわ張り理論』　大修館

Klein, Wolfgang. 1981. Some rules of regular ellipsis in German. In: Klein, W. and W. Levelt (ed.) Crossing the boundaries in linguistics. Dordrecht. 51-78.

——— 1985. Ellipse, Fokusgliederung und thematischer Stand. In : Meyer-Hermann und Hannes Rieser (Hg.). 1985. Bd I, 1-24.

小谷津孝明編　1985　『記憶と知識』　〈認知心理学講座２〉　東京大学出版会

Kuno, Susumu. 1976. Gapping: A functional analysis. Linguistic Inquiry. 7. 300-317.

久野暲　1978　『談話の文法』　大修館

Lyons, John. 1968. An introduction to theoretical linguistics. Cambridge.
國廣哲彌（訳）1973　『理論言語学』　大修館

Meyer-Hermann, Reinhard und Hannes Rieser. (Hg.) 1985. Ellipsen und fragmentarische Ausdrücke (=Linguistische Arbeiten 148,1 und 148,2). 2Bde. Tübingen.

村田勇三郎　1982　『機能英文法』　大修館

Ortner, Hanspeter. 1983. Karl Bühlers Stellung in der Ellipsenforschung. In : Zeitschrift für germanistische Linguistik 11 149-165.

——— 1985. Welche Rolle spielen die Begriffe "Ellipse", "Tilgung", "Ersparung" usw. in der Sprachbeschreibung? In : Meyer-Hermann und Hannes Rieser (Hg.). 1985. Bd.II, 165-202.

坂原茂　1990　「役割、ガ・ハ、ウナギ文」　『メンタル・スペース』　〈認知科学の発展３〉講談社　29-66.

佐藤ちゑ子　1983　「日本語の省略と自由語彙化仮説」　『月刊言語』　Vol.12. No.6. 114-123.

Stegner, Juliane. 1985. Ellipse als Mittel zum Ausdruck der Thema-Rhema-Struktur. In : Meyer-Hermann und Hannes Rieser (Hg.). 1985. Bd. I, 25-54.

Thomas, Andrew L. 1979. Ellipsis : The interplay of sentence structure and context. In : Lingua 47. 43-68.

Tschauder, Gerhard. 1986. Ellipsen und ihre nicht-elliptischen Korrelate. In : Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung 39. 464-471.

Wittgenstein, Ludwig. 1960. Philosophische Untersuchungen. Frankfurt a. M.
藤本隆志（訳）1976　『哲学探究』　ウィトゲンシュタイン全集８　大修館

山梨正明　1988　『比喩と理解』　〈認知科学選書17〉　東京大学出版会

安井稔　1978　『新しい聞き手の文法』　大修館

——— 1983　「英語における省略現象」　『現代英語教育』　20巻５号　17-19.

安井稔・中村順良　1984　『代用表現』　〈現代の英文法　第10巻〉　研究社

吉川千鶴子　1988　「場面のスクリプトと省略現象」　『日本語学』　第七巻第三号　64-76.

Ellipsen, und Rekonstruktion der Ellipsen

Yukiko SHIOYA

Die wesentlichen Merkmalen von Ellipsen bestehen in weggelassenen Elementen. Während die bereits bekannten Informationen weggelassen werden, sind die verbleibenden Elemente Träger neuer, wichtiger Informationen. Der Hörer versteht die elliptischen Äußerungen mit Hilfe der vorhergehenden Gespräche, und der den Sprecher und Hörer umgebenden Situation. Dazu muß er den Faktoren Rechnung tragen, die sowohl aus dem linguistischen Kontext als auch aus der Situation erschließbar sind. Um den Verstehensprozeß des Hörers eingehend zu untersuchen, kann der Begriff "Script der Szene" hilfreich sein.

Obwohl die Ellipsen sich mit dem Begriff der Vollständigkeit verbinden, ist es dennoch schwierig, das genau zu bestimmen, was mit "Vollständigkeit" im jeweiligen Einzelfall einer Ellipse gemeint ist. Dieser läßt sich u.U. durch eine Vielzahl von syntaktischen Alternativen definieren. Das gilt nicht nur für die Äußerungen, die sich auf die Situation beziehen, sondern auch für die Gespräche, die direkt vom linguistischen Kontext abhängen.

（大学院博士課程）